

【ポスター発表】

大学における実践的な福祉・教育分野の学びに関する研究

- 実学臨床教育プログラムの評価 -

東北福祉大学 佐藤 泰伸 (7758)

阿部 利江 (東北福祉大学・7795) 千葉 伸彦 (東北福祉大学・6188)

小崎 浩信 (東北福祉大学・4447) 大橋 厚太 (東北福祉大学大学院・8185)

長期継続的な実践、現場の理解、目標の明確化

1. 研究目的

平成14年度、本学総合福祉学部で開講された『実学臨床教育』(以下、本教育プログラムと記す)は、理論と実践の融合を図ることを目的とし、「実践力」や「考察力」「課題解決能力」といった諸能力を身につけることを目指してきた。

本研究は、学生が本教育プログラムから、どのような学びを得ているのか、また、今後どのような学習課題があるのかを整理し、本教育プログラムの評価を行う。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

本教育プログラムは、大学初年次から段階的に福祉・教育分野の現場で実践的な経験を積み重ねるようなプログラムである。本教育プログラム履修学生は、現場での実践に大きな魅力を感じており、卒業時には、多くの実践と研究に費やした努力に対し満足感や充実感を得ている。だが、一方で、本教育プログラムの履修が困難となり、年度途中で辞退、放棄している例も見受けられてきた。履修の明確な目標を保ちにくいのではないかと、そして、卒業後の方向性が定められてくることで、分野の異なる実践先での学びの意欲が低下することも考えられる。したがって、履修した当初の気持ちや意欲を維持し向上させるための教育的支援体制も重要なことである。

2) 対象と手続き

平成22年度、本教育プログラムを履修した41名。平成21年度に『実学臨床教育』を履修している学生である。本教育プログラムの履修を振り返り、5つの項目から自由記述質問紙を用いた。平成22年7月14日の夏季ガイダンスで質問票を配布し、回収は個々に直接提出とした。

調査期間は夏季休業を含む平成22年7月14日から9月21日までの約2ヶ月間である。

3. 倫理的配慮

本研究で得られた回答は、統計的に処理を行い、個人が特定されないよう配慮すること、また、回答することにより、本教育プログラムの成績に影響が及ばないことを伝え同意を

得た。

4. 研究結果

1) 現場での実践から得られた学び

福祉・教育現場での実践を通して、「現場を理解すること」が34.2%と最も多く得られた学びである。大学初年次から現場で実践を行えることが、学生にとって本教育プログラムを履修する一番の魅力とも言われている。だが、大学入学以前に思い描いていた福祉・教育専門職の姿や現場の理想と現実の違いに、戸惑いを感じる傾向もみられてきた。定期的かつ継続的な現場実践を行うことにより、早い段階から将来の自身の方向性を導き出し、確立することにつながるがといえる。

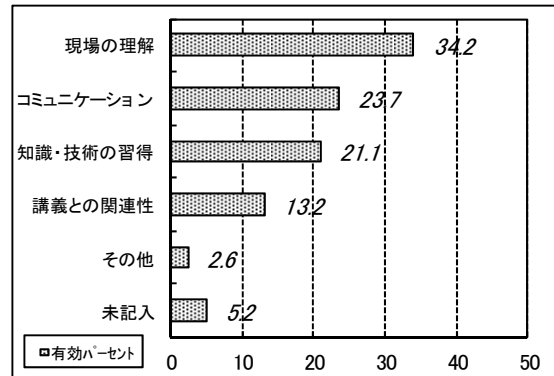


図1.現場で得られた学び(N=38)

2) 現場での実践から得られた今後の課題

定期的かつ継続的な実践を行っていくために、今後の課題として「目標の明確化」(23.7%)が最も多く挙げられた。本教育プログラムは、専門的な資格実習とは異なり、実践の内容が特に決められていない。現場で何を学ぶのか、学生個人が主体的に設定していくものである。また、長期にわたる実践は、ときにマンネリ化することも予想され意欲の低下を及ぼすことも考えられる。そのために実践には目標を明確にして臨むことが必要であり、継続的な実践に意欲を低下させず向上させていくためには、実践を定期的に振り返ることが必要であるといえる。

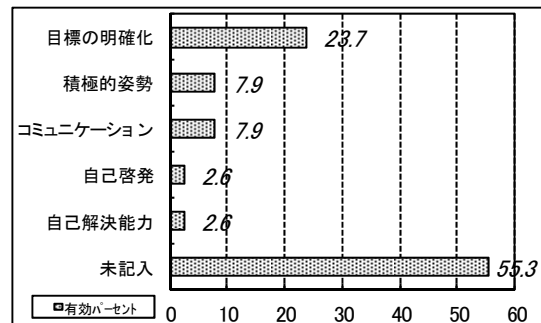


図2.今後の課題(N=38)

本教育プログラムの理念には、本学の建学である『行学一如』を基盤とし、社会福祉・教育に関する高度な知識・視点を有し、実践力・理論化力に富んだ人材を育成することにある。だが、『実学臨床教育』で行う本教育プログラム実践は、知識や技術ばかりでなく、福祉・教育分野を大きく捉えてこれからの方向性を探り、小さくとも刺激や発見を積み重ねていくことが重要なことである。今年度、本教育プログラムも開講10年目を迎え、理論と実践の融合を目指した教育プログラムを今一度、再考していきたい。